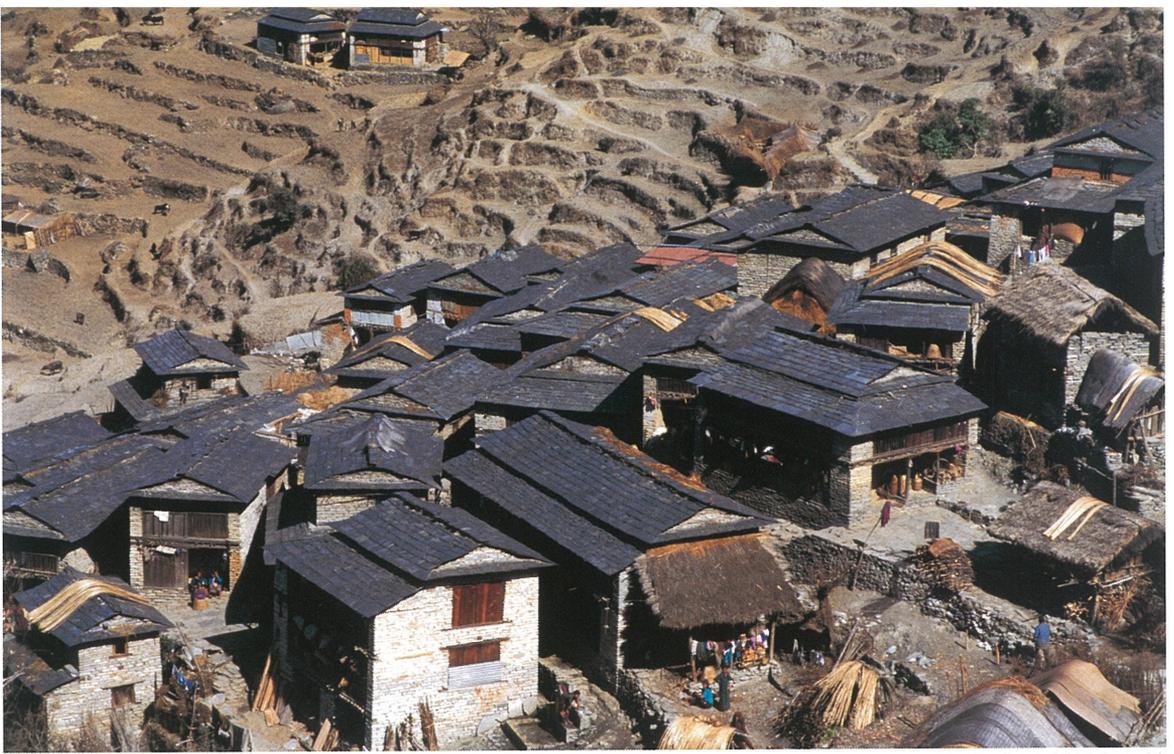


みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

チャンティヤル人の村で交わされる日本語ジョーク
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第1回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5111



チャンティヤル人のクイネ村 (2001年)

みなみ・まきと 1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著『エスノ・サイエンス』(京大出版会 2002年)、『文化の生産』(ドメス出版 1999年)、『アジア読本ネパール』(河出書房新社 1997年)など。

変わるネパールと変わらぬネパール

グローバル化した世界に暮らす

ネパールのチャンティヤルという人びとが暮らす、村の話である。ここでは、早朝、戸外の水汲み場に洗顔をやってくる村人のあいだで、「おはようー。おい、もうゴミ出したか?」などといった日本語が交わされる、というのだ。道路も電気もないこの村に、ゴミ収集車など来るはずもなく、これは茶目つけのあるジョークなのだ。だが、逆にいうと、こんな話が入り込んでいくほど、チャンティヤルという人びとの中には、日本で働いて帰国した人や、現に今なお働いている人が多いのである。

ヒマラヤの麓の寒村や意外な辺境の地で、日本での出稼ぎ経験者に出会うことは、もはや珍しいことではない。一九九九年、パキスタンの都市遺跡ハラッパー近くの街を散策していた時にも、私は数年間日本で働いていたパキスタン人に上手な日本語で話しかけられた。また、今年の夏はトルコ東部のエルズルムという地方都市で、やはり日本で働いていたというトルコ人に声をかけられ、博物館の入り口まで道案内してもらった。グローバル時代の特徴は時間と空間の圧縮だといわれるが、エリートではないごく普通の人びとが私たちの身近に住まいはじめ、そして

チャンティヤル人の村で交わされる日本語ジョーク

日本人に親しみと懐かしさを感じてくれる人びとが世界中に送り出されているのだ。

私は縁あって、一九八〇年頃からネパールという国の文化や社会を研究してきた。だが、研究の対象としてきた人びとが、一時的にはあるにせよ、よもや隣人として日本に暮らすような時代が来るとは予想できなかった。村に住み込んで、その人びとの言葉を習得し、暮らし方や習慣、考え方を学ぼうという従来の文化人類学的な研究は、どうしても「ある土地に〓ある民族が住み〓ある文化を営む」という等式を前提とし、閉じた、あるいは孤立した社会空間を想定してきた。

だが、現実の人間は移動し、越境し、文化は常に更新され変化しているのだ。だとすると、今日求められるのは異文化理解のありかたは、こうした越境する人びと・情報・資本の動態を探りこみながら、グローバル化の中で均質化していく現象と、大勢に反してローカル化し特殊化していく現象を見定めることにあろう。この連載では、ネパールを事例としてグローバル化する世界における「文化の動態」について見ていきたい。

第1回

国立民族学博物館助教授
写真文 南真木人